

「堀内ゼミ」3年生が JICAで研究発表

外国語学部英語コミュニケーション学科国際協力コースで「子どもの未来のための国際協力研究」を専攻する「堀内ゼミ」の3年生が1月21日、JICA地球ひろばで「フィリピンフィールドワーク」の発表を行いました。



堀内教授（前列右から3人目）とその思いに応えた学生たち



フィリピンで体験したスリートチルドレンが成長する過程を知りました。

「家族の絆の大切さ」を実感しました。また、貧困層といわれる生活の中にも、さらに格差があることを体感しました。

今回の「フィリピンフィールドワーク」を通じて、途上国の生産者とパートナーシップを結び、公正な価格で商品を購入する「フェアトレードの有効性」を改めて感じた学生たちは、さらにこの活動を推進していく決意を、発表会のまとめとして述べました。

昨年の夏休みに、学生たちは「国際協力フィールドワーク実践」としてフィリピンで国際協力の現場を体験しました。学生を指導する堀内光子特別招聘教授は、児童労働ネットワーク代表、元国際労働機関(ILO)事務局長補、専門

分野で学生を指導するにあたり、「国際協力を学ぶ者は、必ず現地の実態を見るべき」という信念のもと、万全の体制のもとで同プログラムを実施しています。学生たちは、ライフライの無いマニラのスラム街や先住民・アエタ族の村

でホームステイをしながら、フィリピンについて多角的に研究し活動。それらを通じて感じたことや課題、体験などを「日本とフィリピン」「貧困家庭の比較調査」「困難な状況にある子どもたち」「フェアトレード」の4部構成で発表しました。

どんなに貧しくても、子どもたちは家族やコミュニティの中で目を輝かせて生活。学生たちは「幸せとは何か」と自問自答を繰り返しました。厳しい生活の中、ホームステイ先の家族は心を込めて学生に対応。日本では薄れつつある

「日本に戻って何を感ずるか？」については、「仕事を求めて来日するフィリピン女性へ、正当な職業へ就く支援の必要性」など、現地の人々を思う学生たちの思いが溢れました。